



歌仙二葉抄

中

特別
イ 4
3163
66(2)



貴
14
3163
66(2)

欽仙二葉抄 中

紀友則 右

〇四十一



人皇八代孝元天皇の皇子彦太忍信命の苗裔紀本通抄源
宮内ノ權少輔有朋の孫と云々之と云々深弟也 紀氏ハ武内宿禰
ノ孫也友則任官の事欽仙傳云寛平九年正月十一日任左位
同十一年正月九日任少内記延喜四年七月九日任大内記云云
位ハ五位也職原抄大内記一人相當正六位上近代五位云云大内記ハ
中務乃下司として天子の勅書宣命等の下書とす職として儒門
の文道に達して人々以て官に任ぜらるる也友則和欽の連人なり
中人行年六十少くも之と目づく古今集撰の勅成系に撰集
終るべしと延喜五年二月年章一として記せり友則之を
撰る類は多しなりと云々之の年ハ向年と

まじりてのりみ重なりてくる御もたむ

あまのこゝろぬまをりてくればまればおんこも想へん

夕ざれの御係れがらゝの御音はたまはしつらちどりかきく

拾遺集を部入類しんば御音也夕ざればおん万葉の夕を者とま

どいおとよ文字の御音は御音と古語して夕べなればおん

万葉集十二

夕ざれの御音は御音と古語して夕べなればおん

夕ざればおん御音は御音と古語して夕べなればおん

十一

風せりておん御音は御音と古語して夕べなればおん

夕ざればおん御音は御音と古語して夕べなればおん

夕ざればおん御音は御音と古語して夕べなればおん

〇四十一

常々之御夕ざればおん御音は御音と古語して夕べなればおん

同季如南のありておん御音は御音と古語して夕べなればおん

あまのこゝろぬまをりてくればまればおんこも想へん

あまのこゝろぬまをりてくればまればおんこも想へん

あまのこゝろぬまをりてくればまればおんこも想へん

あまのこゝろぬまをりてくればまればおんこも想へん

あまのこゝろぬまをりてくればまればおんこも想へん

あまのこゝろぬまをりてくればまればおんこも想へん

あまのこゝろぬまをりてくればまればおんこも想へん

あまのこゝろぬまをりてくればまればおんこも想へん

あまのこゝろぬまをりてくればまればおんこも想へん

あまのこゝろぬまをりてくればまればおんこも想へん

又籍と千名とありて合せしむる事

河千名は河のこゝろの昔はしちあらけんはむのひとて

けんがり申さるはむと誓ふとよらて思ふ

猿丸大夫 ニウ 左

いゝとせはさるまゝのりらぎと 紹運録 聖徳太子ノ孫山背大

兄王子子ヲ削、王是猿丸大夫也云 又或説、猿丸を更ハ山王の弟

とて宣化天皇ハ苗裔問りて、け後さるは河を、又河橋

袋草紙云猿丸を更ハ河橋家先ノ弟也

あゝすげのまの橋系ゆくささる君とあゝめまのささる

け家如萬葉集、高市黑人、妻哥也若猿丸大夫ハ件ノ人歎然者

女房也而如家集者送女許之歌是男也集、失次云古今集

真名序、黒主之歌古、猿丸大夫之次也云、け序は初よ古さとも

之所又、猿丸ハ名也とて河氏の人とも思ふ、或説、河削、道後下

野ハ國ハ配流の時暴息とて、あゆ人ハ似く人ノり、ばとて

猿丸と異多とけけ、け後河を河文か、人ノ後の中

よいつるハ史記項羽本紀、楚人、済猴而冠耳云、是楚人ノ性

ささる、ささるみ、け後河を河文か、人ノ後の中

一のり、くすけ、け後河を河文か、人ノ後の中

とけ、け後河を河文か、人ノ後の中

か、け後河を河文か、人ノ後の中

さ、け後河を河文か、人ノ後の中

又天武、河を河文か、人ノ後の中

又天武、河を河文か、人ノ後の中

のてつりし名を云後定しとも申え候又二荒山入傳紀は猿丸と
以着られと懐續して歌人よあり候は是も別人也歌仙傳云ノ不知
何代人但古今和歌集序大伴黒主之處注言猿丸太夫次也
付伴文以案之黒主仁和初獻大嘗會和歌之由見被集
而當昔祿古可謂上古人云又云雖尋件人歌於万葉無
所見若是異名欲將假他名入彼集欲往代事暗而以難決而
臨延喜御宇彼撰古今和歌集之日件太夫歌多載彼集
是以迴私案件太夫若撰万葉集之後元慶以往之比人欲云
大夫ト云右京大夫九京大夫後理大夫中官なりを云云又云六
官よりいひ五位の通稱と太夫と云之無官の太夫云と云官なく
して五位の人ありとい之御紀は猿丸を又も五位の人とてあり候
多名所或人云田との志しよ若若と云前あり候とも猿丸を又も

猿丸のたれさういふところの類一書の名もれが皆人志候とも
田との道はよりの前も是
とららぬたれまきいふに申すはつらもくともよきまひか
猿丸は保よあり古今春うとよ入り歌しらぬのみ人志らぬはあり
とららぬとよを道と書り万葉集に彼けと書り保よあらうとよと
同しなつさといふまよといふ心よりいひ又芥のまよとたつさといふ
る字も有り
月清集
平家物語にひびくは心さびきふ新よれ書のかのうらな
是ハ本ときり申之和名録鑑唐韻云鑑音繁漢語抄廣野芥云この
とららぬの前のたつさといふは心さびなりともいふ心さびの心
なつさとなつさといふは心さびの心さびをこのたつさといふは心
さびの心さびといふは心さびの心さびといふは心さびの心さび

下乃白多子子の常と我ととていひしりては真ふり物すこと
一とていふるがものハ是とていひて我とていふるも亦あを味あつる事と
の心とて思ふのはさぬよ一とていふるのさびしき事也我とていふる程
感情がさういふ一とていふるも亦さす事とて我とていふる事とていふ
万葉一とていふるも亦さす事とていふるも亦さす事とていふるも亦さす事と
よのつひとていふるも亦さす事とていふるも亦さす事とていふるも亦さす事と
なりしとていふるも亦さす事とていふるも亦さす事とていふるも亦さす事と

^{六非} みる月乃がまじくは心のやうなまじりぬるにのこさすのさこけり

^{五本十五} みる月乃がまじくは心のやうなまじりぬるにのこさすのさこけり

解れはまじりていふるも亦さす事とていふるも亦さす事とていふるも亦さす事と
して常程の家紙 基徳相傳の書とていふるも亦さす事とていふるも亦さす事と
様とていふるも亦さす事とていふるも亦さす事と

○平田

池とていふるも亦さす事とていふるも亦さす事とていふるも亦さす事と
又或は池とていふるも亦さす事とていふるも亦さす事とていふるも亦さす事と
るゆえにうぬぬ人もさす事とていふるも亦さす事とていふるも亦さす事と
の心とて思ふのはさぬよ一とていふるのさびしき事也我とていふる程
感情がさういふ一とていふるも亦さす事とていふるも亦さす事とていふるも亦さす事と
万葉一とていふるも亦さす事とていふるも亦さす事とていふるも亦さす事と
よのつひとていふるも亦さす事とていふるも亦さす事とていふるも亦さす事と
なりしとていふるも亦さす事とていふるも亦さす事とていふるも亦さす事と

みる月乃がまじくは心のやうなまじりぬるにのこさすのさこけり

小野小町

右

拾芥抄に出羽郡司、女仁明、時義和之比、人也。云歌仙傳、親房の古今抄等、是も同一郡司と云國守、今掾目など、りくとも同一く郡一、大領、小領、主張、主典、とく、りくとも郡司と云、或説、出羽郡司小野良實、女、又常澄、女、三光院、御説、當澄ト云、或抄、小町へ桓武天皇、於、中納言良實、孫、出羽郡司小野良家、二、女也、出羽守とて、十二と、清和、於、御宇、よと、倍せり、一説、出羽守、良實、が、女、之後、滅、天皇、の、御時、良實、の、女、之、りて、十五、ゆ、て、京、よ、入、十、七、よ、一、と、母、よ、出、られ、十九、ゆ、て、父、良、實、也、良、實、一、カ、一、と、亡、死、下、三、一、と、別、す、卑、孤、無、親、の、身、と、ぬ、く、都、は、ぬ、く、好、色、と、て、母、と、と、り、ぬ、く、今、是、と、あ、か、ら、後、く、り、ぬ、く、日本、の、記、録、よ、る、に、又、作、人、の、書、云、く、り、も、さ、せ、る、説、を、り、ぬ、く、は、終、り、一、と、一、と、古今、集、よ、小、野、貞、樹、と

よ、み、と、せ、る、子、り、り、同、ド、氏、を、れ、バ、小、町、ハ、け、親、族、り、る、在、時、代、ハ、仁、明、
五代文、德、五代帝、は、以、り、人、と、り、り、浮、城、御、統、と、く、ぬ、れ、バ、小、町、と、業、
平、文、姫、よ、り、て、業、平、ハ、小、町、ゴ、ヤ、と、く、り、小、町、ハ、業、平、の、女、也、ぬ、
才、と、惟、と、て、離、ふ、一、と、一、と、後、小、町、ハ、籠、居、へ、ト、リ、之、作、の、長、良、が、も、
と、は、あ、り、と、く、り、と、り、古、今、後、撰、よ、小、町、が、始、り、才、り、り、後、撰、よ、
又、小、町、が、孫、の、方、あり、皆、小、町、が、あ、ぬ、小、町、が、く、ま、と、と、名、と、と、り、
より、是、ハ、小、町、が、才、よ、ま、の、ま、き、ゆ、へ、さ、ぬ、一、と、一、と、古今、の、序、よ、
小、町、い、り、一、の、名、通、張、の、流、り、あ、り、ぬ、れ、ら、る、や、り、ぬ、は、は、り、
い、り、
り、
難、か、り、名、を、云、ひ、ぬ、ら、き、ま、の、れ、小、町、死、せ、し、り、神、中、抄、に、十、年、
を、系、し、て、好、色、之、知、り、ぬ、本、は、必、死、を、故、屍、在、八、十、嶋、と、云、く

つらふふとくけりりききあハ極ちさりのと 和名抄 上流流文云
岸無根浮氷上云 故 極成たえそとと先之 朗詠 觀身
岸 額 離根 草論 命 江頭 不繫舟云 文選 酒德 頌 萬物
擾々焉如江漢之浮萍云 晉傳 玄歌 浮萍本無根非水
將何依云

極とせそそゆよううの海を池のあつとあぢゆあつと 伊勢
ささやらの浮葉の海程ささく人ともていさしとさあつハゆんと
を習之伊勢ゆゆのよ自り里りーとささりーとてつりふさりり
とあつともわりは折けりともさ義也 舟のあぢゆあつとてささあ
極とささくあつとささりささるあつとささりささるあつとさ
とて一後よけち五文字よむのあつとささりささるあつとささり
ささりささるあつとささりささるあつとささりささるあつとさ
ささりささるあつとささりささるあつとささりささるあつとさ

かぐいひとらうらるゆゆりよ小町がよなるあつとつりゆ後よとささり
おろしとささりささるあつとささりささるあつとささりささるあ
なまよささるあつとささりささるあつとささりささるあつとさ
我ハもささるあつとささりささるあつとささりささるあつとさ
まの野よわくささるあつとささりささるあつとささりささるあ
よゆとささるあつとささりささるあつとささりささるあつとさ
小町ハ也このよとささるあつとささりささるあつとささりささるあ
ゆゆとささるあつとささりささるあつとささりささるあつとさ
ささりささるあつとささりささるあつとささりささるあつとさ
奇妙しとて古今の序よあつとささるあつとささりささるあつとさ
ゆゆとささるあつとささりささるあつとささりささるあつとさ

中納言兼輔 左

勸修寺家元祖良門丹舍人從四位上贈
大政大臣正一位孫右中將利基丹子基堤中納言

と申す母六伴氏歌仙傳云々寛平九年七月昇殿十年正月任讚

於椽四月八日昇殿昌泰四年二月任左衛門少尉延喜二年正月

七日叙從五位下殿上
九六二月廿一日昇殿三年正月任內藏助六年正月

七日從五位上勅如元七年二月兼右兵衛佐十年正月廿七日補藏人

任右衛門佐助如元十三年正月任右近少將助如元十四年正月兼近江

介十五年正月七日叙正五位下外衛
近衛十六年三月兼內藏權頭十

七年正月兼內藏頭八月廿八日補藏人頭十一月十七日叙從四位

下同日三日補藏人元
次如十九年正月兼倫前守同月七日昇殿廿一

年正月七日叙從四位上延長二年二月一日兼近江權守五年

正月十二日叙從三位任中納言四月廿九日昇殿八年十二月兼右衛

門督兼平三年二月十八日薨時年五十七云

經東入少仲くすく小少の輩はねれおくかきとまき

後撰集長部よ入酒年よまねね源吉又か終ひくときととりり

清原深基又父祖つまひくくくは國史と考ふよ清原姓合人

親王の子孫のしるはねお諸皇子も末も清原の姓と賜さうたれ

他者又父祖もしるはね大系圖よ合人親平貞代平右雄通雅

海雅一房則深養又云く平のつうけゆく兼るの外ともく四十一

おしり一終り終るうさ中ふあしたくく少のね風のきうしうし

しうしうしげとの白よつりやゆし文りよまきひやもすしうし

界のまね面白さう少入思ねね風うすあまうしうしうし

春を終るさあひりふふと終るも文ゆくとつりあそふ終るさ

よふとあひりふふと終るも文ゆくとつりあそふ終るさ

多洲の... 伯牙絶絃破琴終身不復鼓之云今
子期曰洋洋乎子期死伯牙絶絃破琴終身不復鼓之云今
けおよ... 伯牙絶絃破琴終身不復鼓之云今
素々秋風拂松疎韻落云此句朗絶し心まろ

中納言朝忠 右

三條右大臣藤原定方二男母中納言山養御の女なり後三位右
衛門督土御門の中納言と号す大和守清光の思の中納言と号す近衛右

○五十

額云天曆六年参議康和三年中納言康保三年十二月参
七^{五十}歌仙傳云延喜十七年十月十四日昇殿延長二年二月任右近
衛將監三年補東宮藏人四年正月七日從五位下^{東宮}五年
十一月任侍從八年九月九日昇殿^{東宮}十一月十八日補藏人九
年三月任右兵衛佐兼平五年二月任左近權少將六年七月
月七日叙從五位上同月兼播磨權介天慶四年正月七日
叙正五位下三月兼丹波介六年正月七日叙從四位下同月
十四日昇殿二月任内藏人九年二月任近江守十一月十九日叙
從四位上悠紀天曆二年三月九日昇殿五年正月任左近衛
中將六年正月兼伊勢權守十二月任参議七年正月兼備
前守八年正月任大宰大貳三月辞大貳十年正月叙正四
位下同月兼讚岐守同二月七日昇殿天德元年四月任右衛門

著賢木立殿四面及内外門在齋内親王定畢即上宮城
内、使所為初齋院被禊而入至于明年七月齋於此院更
上城外淨野造野宮畢八月上旬上定吉日臨河被禊即
入野宮自遷入日至明年八月齋此宮九月上旬上定
吉日臨河被禊參入於伊勢齋宮云右雅子內親王亦宮
よまのりハ在院の兼年二年十二月の上定より齋を
つりし亦宮よ定よりなりなり於亦宮より亦宮并所の
亦宮より齋一ハ亦の亦河年より亦宮より伊勢齋宮
より亦宮より齋一ハ亦の亦河年より亦宮より伊勢齋宮
亦宮より齋一ハ亦の亦河年より亦宮より伊勢齋宮
亦宮より齋一ハ亦の亦河年より亦宮より伊勢齋宮
亦宮より齋一ハ亦の亦河年より亦宮より伊勢齋宮
亦宮より齋一ハ亦の亦河年より亦宮より伊勢齋宮
亦宮より齋一ハ亦の亦河年より亦宮より伊勢齋宮

と書りて人と一書りと云ナリ身と云ハとしてわくひナリ終つてのさうり
あひひらきさきとつていしその例なりひうすいハ
意求る也々々の例なりそのさきハ例の云々なり例は
かの衣也と云ハ天の衣なりと云ハと云ハと云ハと云ハ
と云ハと云ハと云ハと云ハと云ハと云ハと云ハと云ハ
うらさきと云ハの例なりと云ハと云ハと云ハと云ハ
よひと云ハと云ハと云ハと云ハと云ハと云ハと云ハ
分ちれぬ下は今の例なりと云ハと云ハと云ハと云ハ
つても例なり

藤原高光 右

貞信公忠平の孫として九条右大臣師輔公の八男也人皇二十二代

よむかりしとくしりしゆひかりとめし 露を着袖うすしん童如人
やどハ露もさすかりしとむけさるん公オハ露集よけおの酒舟よ
云ハ水の言れんくしりしゆひの席尾ハ少減るゆり人の部をすくふ
よきしみりしりけハ露ゆすすも露着のとなあす半之露
露もみりしりけも目しつておの言ゆねもさ清げ おん夏
ゆきとこころとさくもくよ部入ハ一ちりささるんかちし平し
やかりしとくしりしゆひとけしき山終もまれりゆき通しり
やど又もや今ハ一ちりささるんかちし平しとゆきりし
移りし日と暮るるしとまの暑天ハ中ひれば暑ハ去のくさき
言もあふよ今ハ一ちりささるんかちし平しとまの暑ハ去のくさき
しりし言終るる也神ハこのきたるゆきりしと部をすくふ
ゆきりおの露清部入ハ一ちりささるんかちし平しとゆきりし

一ちりささるんかちし平しとゆきりしと部をすくふ
てびりしとむれどいゆきしりし世文くかくのしりしゆきも
我欲する也とさくしとまきすハ是ゆきと部をすくふとわがハ
遊宴ハさき先どうりよりしりし教戒ハ一ハ部をすくふとわがハ
さきしりしゆきとさきしりしゆきとさきしりしゆきと
一ちりささるんかちし平しとゆきりしと部をすくふ

玉中忠志介 右

玉中忠志介 忠界先祖不詳他者部類 従五位下
本經子云ハ一親府生木五九忠衛子言今序 右衛門 府生
大和物部 泉如大将 故たりのゆきとのよきとさきしりしゆき
ゆきとさきしりしゆきとさきしりしゆきとさきしりしゆき

河馬よのうれくる左右大臣以下皆直衣して殿上人の布衣なり
帷の厚もさしゆ寝しりめらし小庭とありておねとひくと被
褥より云々下略扶桑略記五十九代宇多天皇寛平八年閏正月六日有子
日真行北野雲林院云々おねハ宇多天皇よりおねと云々云々
おねどもけふの日の遊ハ何の趣と云々云々云々云々云々云々
あつと正月のうけののうけのうけのうけのうけのうけのうけの
てふ年の齡と云々云々云々の後云々と云々云々云々の日ハ何れも
うれし今日もかざり子日と通ておむぐ初ねの名負之拾芥抄
上本三正月子日登岳何耶傳云々正月子日登岳遠望四方
得陰陽靜氣除煩惱之術也十卷紀云董勅答問歲首祈社
枝男七女二以為藥飲之云々杜子美詩欲存老蓋千年意
為負松根數寸裁云々

齊宮女門

左

從四位上徽子女王とり三品式部卿重明親王女母ハ負信公の女
也拾芥抄後材上女御號齋宮女御又霽景殿女御云々歌仙傳曰
兼平六年九月十二日卜定八歳為齋宮天慶八年正月十九日
遭母氏喪同七月十六日退出天曆元年正月入舟年十九五年正
月廿三日內宴叙從四位下本傳應和二年正月八日叙從四位上寛
和元年卒年五十七或五云云々齊宮始ハ神皇正統紀云々崇神天皇
漸良神威而即位六年己丑以神代鏡造石鏡姫神初
子令鑄鏡以天目一箇神初子令造劔於大和國宇多郡
作此兩種為護身之璽安置同殿以神代鏡及璽一劔
託皇女豐鋤入姬至大和竹立縫色立神籬奉崇焉云々
細々豊鋤入姬命天照大神の御心よかおひのり故よ去後乘仁

洞花集恋入洞書流氷焼東京とヤクウ時百首おまもりたる
まゆらひのうらみはのうらみと云く強くも焼とまゆらひのうらみ
まゆらひ又まゆらひのうらみおん人を恋くもやかくと切し
ども悪人のほれまておひとまげねしとまゆらひなり宗祇は
動なきまゆらひのうらみまゆらひのうらみまゆらひのうらみ
らてまゆらひのうらみまゆらひのうらみまゆらひのうらみ
らまゆらひのうらみまゆらひのうらみまゆらひのうらみ
すれどもまゆらひのうらみまゆらひのうらみまゆらひのうらみ
まゆらひのうらみまゆらひのうらみまゆらひのうらみ
このまゆらひのうらみまゆらひのうらみまゆらひのうらみ
まゆらひのうらみまゆらひのうらみまゆらひのうらみ
まゆらひのうらみまゆらひのうらみまゆらひのうらみ

まゆらひのうらみまゆらひのうらみまゆらひのうらみ
まゆらひのうらみまゆらひのうらみまゆらひのうらみ
まゆらひのうらみまゆらひのうらみまゆらひのうらみ
まゆらひのうらみまゆらひのうらみまゆらひのうらみ
まゆらひのうらみまゆらひのうらみまゆらひのうらみ
まゆらひのうらみまゆらひのうらみまゆらひのうらみ
まゆらひのうらみまゆらひのうらみまゆらひのうらみ
まゆらひのうらみまゆらひのうらみまゆらひのうらみ
まゆらひのうらみまゆらひのうらみまゆらひのうらみ
まゆらひのうらみまゆらひのうらみまゆらひのうらみ

